

## 魯迅と大衆語論争

著者	松尾 善弘
著者別名	MATSO Yoshihiro
雑誌名	漢文學會々報
巻	26
ページ	48-58
発行年	1967-06-15
URL	<a href="http://doi.org/10.15068/00148666">http://doi.org/10.15068/00148666</a>

## 魯迅と大衆語論争

松尾善弘

一九三〇年前後の中國は、まさに「暗黒」の形容詞がびつたりする世の中であつたといえる。五大軍閥巨頭のなかでも、四大家族をバックに着々と勢力を固めた蔣介石は、社會のあらゆる分野に獨裁權力をふるい、文化活動家に對しても、二九年には「C・C團」三二年には「藍衣社」と呼ぶ特務組織を作つて狂暴な彈壓を加えた。こういう時には、また、權力に迎合して公然と復古を唱える人士もあらわれる。彼らは小・中學校の正課に古典を加え、經典を讀むよう強制し、「古典を讀んで國民思想を統一せねばならぬ」と主張した。この文言復興論は五四以降の白話文運動に對する挑戦であり、のちしばらくの間、白話・文言論争をよび起した。そしてこれをきっかけに、三四、五年頃を頂點にして激しい大衆語論争がまきおこつた。

「大衆語」とは一口で言えば、「大衆が話し、聞いてわかり、讀むことのできることは」であるが、大衆語論争で議論された内容は、國語問題、すなわち普通話と方言に關するもの、文學言語の問題、すなわち白話や文言と當時のはなしことばに關するもの、更にことばの道具としての文字の問題、すなわち漢字、簡體字、注音符母、國語ローマ字、ラテン化新文字に關するもの、と廣範圍にわたつて種々の問題を包蔵していた。これらの要素が密接に結びつき、更に社會情況と複雑に絡みあつた形で論争が展開されたわけだ、中國の言語運動の歴史のなかで眺めるとき、私はその一環として、大衆語運動期として位置づけてみようと思う。そしてまさにこの時こそ新しい言語觀に立つた勢力が舊い勢力を打倒し、主客顛倒した言語運動を正しく發展させるようになった轉換期であると考ええる。

いま、大衆語運動を大きく、言語方面、文體方面、文字方面の三つにわけて解きほぐしていき、その中で、ペンで書くより足で逃げまわる方が忙しかつた。魯迅の大衆語に對する見解を、再度論争の中に嵌めこんで眺めてみようと思う。

一

言語方面の運動とは、狹義のそのの意味で、國語運動つまり最近「普通話」といわれる標準語が確立される過程の運動のことである。方言の多い中國で、古來民族共通のことばとして想定されていたものは「(北京)官話」であつたが、一九一〇年に至つて資政院(國會)議員江謙が「國語」と改稱するよう奏呈して以來、國語統一の運動は時の民族獨立運動と相俟つて急速に盛りあがつてくる。ところで一口に「國語」と言つても、その中には、①外國語に對して本國(民族)のことば。②方言に對して全國の共通語。③國定の言語、という三つの意味が含まれている。われわれが普通に考えている「國語」は第二の「民族共通語」の「國語」である。ところが中國の當時の國語論者、なかでも爲政者の側の念頭にあつたものは、第三の國定の言語——それは多民族で成り立つている國家では弱小民族を壓迫する道具と化す可能性がある——であり、人爲的な國音であつて(一九一三年、讀音統一會が六五〇〇餘の漢字讀音を審定した)國音)、上から人民におしつけようとするものであつた。従つて彼らは方言に對して、方言の提唱は、いなかのおくれた意識を正當化し、外來文化の吸収を阻害し、「國語」の發展を阻害し、中國を外國にかえてしまうものだ(『促海曙編「中國語文的再生」』)という見解しかもちあわせていない。つまり彼らの思考は、國語統一——方言抑制——漢字擁護——國語ローマ字普及という傾向にある。これに對し大衆語論者は、方言の提唱とは、方言を發展させ、新しい符號を採用して口頭語を書面語に變えることである。こうすれば、その同一方言を使用している人々の知識交流に役立ち、接近した方言がよりいつそう融合しやすくなり、各種の進歩した知識をとり入れて大衆の文化水準を高め、落伍した面を少くする。(上同)と考えている。結論を先に出せば、彼らは、漢字廢止——ラテン化——方言の發展——共通語形成という思考過程を辿つていると言える。

例えば大衆語論者の旗手魯迅は、中國の方言區を大雑把に、北京語、江蘇・浙江語、湖北・湖南・四川・貴州語、福建

語、廣東語に區分し、更にそれらを細かに區別したうえで各地の土語を書けばよいと言う。そして問題はむしろ、この各地方の大衆語文を、將來、結局特殊化するか、一般化するかという點にあり、"それぞれ各地方の方言の語法と語彙を、更に精煉して、發達させること(特殊化)"と同時に、"今日、船着場、公共機關、大學などですでに話されている共通語らしいものを基盤にして、方言の中にその「新しいものを加えて」行き、整理し發達させる。"つまり、この、自然から生れ、それに人工を加えた言葉が一般化する"必要があり、そうなつてはじめて"我々の大衆語文は大體統一したといえる"(以上いずれも「門外文談」と言つている。そして魯迅は、"田舎で用いる啓蒙的大衆語はもともと方言を使うが、必ず先進者(自覺した知識人)が改良し、より明確にする任務を負わねばならない"("管曹聚仁先生信")と指摘する。ここには魯迅(大衆語論者)の、大衆に結びつき、大衆を導き、大衆の自覺を待つて大衆と共に歩む、そして長い見通しのなかで國語統一をはかろうとした姿勢をみることができる。さらにまた"中國ではなんといつても北方語——北京語ではない——を話す人が多いから、將來もしも全國各地に通用する大衆語(標準語、筆者註)が實現するしたら、その主力は恐らくやはり北方語だろう"("門外文談")とした魯迅の「眼力」の正確さは、一九五五年、第一次全國文字改革會議で出された共通語についての結論"北京語音を標準音とし、北方語を基礎方言とし、模範的な現代白話文の著作を語法規範とする普通話——漢民族共通語"("第一次文字改革會議文件匯編")を見れば歴然とする。蛇足ながら"特殊化" "一般化"は現在「規範化」の問題として大大的におしすすめられている。

## 二

われわれが日常ふだんに使つてゐるはなしことば(口頭語)とノートなどに書き表わすことば(書面語)は完全に一致することはまずありえないけれども、標準語を形成していく上で、その正しい語彙・語法の規準となるのは、文學作品などの書面言語である。五四前後ごろから胡適らによつて提唱された言文一致運動も、そのころはなしことばと全くかけはなれてしまつていた文言文に反對して、"明白如話"ふだんの話しことばのようにわかりやすい白話文を書こうというもの

であつた。しかし、それが依然として半文半白のわかりにくい文章に終つていたことに對して、瞿秋白らは更に徹底した口語體の文章を書くよう強調した。瞿秋白は當時の文學革命と文章體改革について要約次のように論じている。

「辛亥革命後、一九一八年の文學革命までを第一次文學革命として、その間の文章體の改革をみると、そこには「紅樓夢」や「水滸」等の舊式白話を繼承しようという吳稚暉らの白話文主張もいくらから見られる。しかし總じて、梁啓超式の論文體や林紆の翻譯小説、吳沃堯の「二十年目睹之怪現狀」などは、その意圖するところが小説を文學と認めることとか新思想を宣傳することにあり、白話で小説を書く意義を十分認識していなかつた。そのため、文言廢止を主張するでもなく、淺薄な禮教改良主義を舊文體の中にもりこもうとしただけに終り「維新思想」も全く「字を識つている下等人」の社會層へさえ普及することがなかつた。

同じように、第二次文學革命（五四から三〇年まで）の文學も、内容的にはいくらか「新しい文學」がないではないが、そこに書かれた文章は依然として現代人のはなしことばとは似ても似つかぬ「鬼話」（死んだ人間のことば）であつて、單に西洋かぶれしたいくらかの新興知識人層に受け入れられたにすぎない。

つまり、第一、第二次文學革命とも、一握りのインテリがひまつぶしにからくり出したみせかけの文學革命であり、根本的に言えば全くの「白革」（むだ革命）である。それというのも、すべて正しい文章體の改革が伴わず、文言文と訣別した眞の口語體文章の確立がなかつたからである」と。（瞿秋白文集——論文學革命及語言文字問題）

折角提唱された白話文運動であつたが、結局は文言と五十歩百歩の領域にとどまつてしまつたことに對して、瞿秋白は今度こそは現代人のいきたことばを寫しとつた「下等人の下等人」にも通用する新中國文——それは根底に「文字改革」がなければならぬが——で書かれた文學作品を作り出す第三次文學革命を起さねばならない、と言つている。この點については魯迅も、「白話文は「話のようによくわかる」ものでなければならぬ答なのに、實際にはそうなつていない。もしわかるようにしたければ、第一に、作者がまず知つていようで知らない字を放棄し、生きている人の口から、生命

のある語彙を採り入れ、紙の上に移すことだ。」「(人生識字胡塗始)」と述べ、その際「やむをえない場合には、大衆語文は文言、白話、時には外國語も採用すべきだ。」「(大雲粉飛)」と指摘することを忘れない。

さて、瞿秋白の、眞の文學革命は眞の文體改革がないかぎりありえないという理論は、眞の文學は誰でもよみかきできる状態の中で、勞働者大衆の手によつて作り出されねばならないという方向へ向かうが(中國新文字十三原則)、その爲、彼は先ず、封建社會の產物であつて今では支配階級が勞働者大衆を壓迫する道具と化している漢字をすてさり、文言を廢し、廣大な人民が誰でも驅使できるラテン化文字にしなければならぬと考へた。彼は晨報特派員としての在ソ中、革命後のソ連における文盲一掃運動に觸發されて、吳玉章らとともに「中國ラテン化字母」を考案し(二九年)、その普及をめざした。それは最初ソ連極東方面の中國人勞働者に廣まり「北拉」と呼ばれた。(倉石武四郎「漢字の運命」)

一方、時の言語學者黎錦熙<sup>三</sup>らも、當時の「大衆語文學」なるものが依然として「小衆」の文學にとどまり、あるいは「大衆のための文學」になつてしまつてゐる情況に鑑み、眞の「大衆語文學」を建設する爲には、自覺したインテリが大衆の中に入りこみ、大衆の一員となつて、古い形式(漢字)を捨てさり、新しい形式による文學を作り出さねばならないと説いて、「國語ローマ字」(二八年布告)の教育運動に努めた。(黎錦熙「國語運動史綱」)

### 三

こうして文學界は言うに及ばず、教育界や廣く報道關係機關にわたつてたたかわされた大衆語論争の中で、權力の側について從來のやり方からはみでないようにするか、大衆の側に立つて革新の方向へ向かうかというわかじめの鍵になつたのが、「漢字」に對する評價のちがいであつた。

漢字擁護論者、即ちラテン化反對論者はいう。「漢字は象形文字であり、中國固有の文化であつて、古來大衆の生活慣習にマツチしている。だから漢字は拼音化することはできないし、またしてはならない」と。そして、彼らは「大衆語を討論したらまず字を學びなさい」とか、「まず教育を普及し、まず大衆に漢字を覚えさせ、それからやり方を考えよう」

〔上記「中國語文的新生」中の高而、阿龍論文〕と主張し、大衆語運動を歪めて漢字識字運動にすりかえ、微妙な形で雲散霧消させてしまふ危険性を持つていた。

漢字は確かに中國の文化を形造る上で一定の役割を果してきたものであるが、ひとたび大衆の基盤に立つて眺めてみると、むしろその弊害の方があまりにも大きいことに氣づく。文明の利器であるべきはずの文字が、封建社會のなかで一部上層支配階級の獨占物と化し、神格化されて、逆に大衆を暗愚の世界へおいこむ役割を果している。こういう状態に對して漢字廢止論者、即ちラテン化賛成論者は徹底的にその惡弊を追求している。以下魯迅の意見を抄出してみる。

“大衆語文の音の數は文語や白話のそれより多いから、もしも漢字で書くとすれば、頭を使うばかりでなく、大變暇がかり、紙や墨も不經濟である。この四角い字の弊害を伴つた遺産のお蔭で、我々の最大多數の人々は、すでに幾千年も文盲として殉難し、中國もこんなザマとなつて、ほかの國ではすでに人工雨さえ作つていふ時代、我々はまだ雨乞いのため蛇を拜んだり、神迎えをしたりしている。”〔漢字とラテン化〕“だが古人は決して馬鹿ではなかつた。彼らは早くから形象を簡單化して、寫實から遠ざかつていた。篆書の圓や屈曲には、まだ繪畫のなごりがあるが、隸書から今日の楷書になると、實物の形とは天と地ほどもちがう。だがその基礎は、何ら變化していない。天と地ほどもちがつて來て、象形でない象形文字になり、書くのにはわりと簡單になつたけれども、覺えるのには非常に困難になつて、一字一字、宙に覺えこまねばならない。しかも若干の字は、今でも決して簡單ではない。たとえば「鸞」とか「鸞」などを子供に書かせたら、まず半年は練習してかからないと、半寸四方のマスの中にかくのは大變むずかしい。”〔門外文談〕“わが中國の文字は、大衆にとつて、身分や經濟などの外に、もう一つ高い敷居がある。それはむずかしいということだ。この敷居だけでも、十年位の年季をいれないことには、なかなか越えられない。これを越えたものが、つまり士大夫というわけだ。ところがこれらの士大夫がまた、一生懸命になつて文字をむすかしくしはじめた。”“文字が覺えやすく、誰にも讀めたら、文字は尊嚴でなくなり、士大夫も同時に尊嚴ではなくなるからだ。”〔上同〕

つまり漢字は、難學（學びにくく）、難認（みわけにくく）、難記（覚えにくく）、難解（わかりにくく）、難讀（讀みにくく）、難寫（書きにくく）という難點があると同時に、更にそれに付隨した社會の歪弊がある。（念のために書き添えると、現在の八箇化理論は以上のような漢字のもつ、學習に困難で應用に不便な缺點に對して、①學習上の困難を少くする。②書寫上の時間を少くする。③閱讀上の効果を高める、という目的のもとに、漢字の筆畫を出来るだけ少く、十畫以内にとどめようと努力されているものである。）そこで、「たしかに漢字は古代から傳つて來た寶である。しかし我々の祖先は、漢字よりもつと古い。だから我々もつと古代から傳つてきた寶なのだ。漢字のために我々を犠牲にするか、それとも我々のために漢字を犠牲にするか。これは心を失つた氣遣いでない限り、誰でもすぐ答えることができる。ものであり、今ほもう「書き方をラテン化する」一筋の道があるのみだ。これは大衆語文と分つことのできぬものだ。」（「漢字とラテン化」ということになる。）

「今年の上海の暑さは、六十年このかたいまだかつてなかつたものだそうだ」に始まる「門外文談」の「發端」のなかで、魯迅は近所の屋根裏部屋や裏二階に住んでいる職人たち、店員、書店の校正係、腕利きの製圖工と夕涼みしながら閑談する話を書いている。そこにそれとなく示されているように、魯迅が以上のような大衆語論争に参加し議論を展開していく際、その根底には、非常に強い「大衆」の意識があつたこと、しかもそれは單に「大衆の中にはいり、大衆の一員となつて」（埋没して）しまうものではなく、大衆を導き大衆を前面へ押しやりながら大衆の基盤の上にしつかり立つている自覺したインテリの自負が感じられる。だからこそ彼は、「漢字と大衆は兩立しない。」（答曹聚仁先生信）と斷言し、あすも知れぬ病床に横たわりながら、「漢字が減びなければ中國は必ず滅びる。」（救亡情報員の訪問に答えて）という發言がなしたのではないだろうか。

#### 四

大衆語論争のファイナレにあつてリングに登場した花形選手は、國語ローマ字（派）とラテン化新文字（派）である。今日の漢語拼音方案が双方の長所をとり短所を補いあつて作られたものであることに見られるように、字母の形體上この



兩者はほとんど差異はなかつた。ところが實際上兩派に激しい議論の應酬があつたというのは、それぞれの成立過程や實施方法に相違があつた。すなわち、國語ローマ字は、從來の切音字運動の流れの中で、注音字母（一九一八年公布、二八年注音符號と改名）について出來たものであり、字母こそちがえ、漢字に注するための符號であつた。だから平上去入の四聲符號を標記し、それもつづりの中におりこんで表わす。根本に漢字廢止を主張するラテン化派に言わせると、國語ローマ字派の、漢字に拘泥し漢字の意識を拂拭しきれないもどかしさと押しつけがましい「國語」の四聲標記、さらにそれを標記する際の十ヶ條のつづり方規則は面倒で覺えにくいものである。

一方、ラテン化新文字は目に一丁字なき廣範な大衆に、自分のはなしことば（方言）をそのままつづれるようにという目的で作られたので、簡略で四聲符號をつけないことを原則とする。これがソ連で作られたというので一種の文化侵略だということ、四聲標示をしないとすれば同聲同音語、例えば黎と李、章と張、楊と羊などの區別がつかないではないかというのが國語ローマ字派の言い分である。しかし、この點については瞿秋白の、「中國語は孤立語の系統に屬し、單音節語が基本であつたが、現代の中國語は方言、普通話にかかわりなく、二音節化がすすんでおり、單音節の語は減少しつつある。また形成部分（語尾の子、兒、着、了など）がはつきりしてきて、ローマ字つづり化の可能性をますます増大している。」と指摘しつつ、「①現代中國語は複音語が増大する傾向にあり、複音語をつづけて綴るなら同字語も少くなり、且つ聲調標記も必要となくなる。②同音異義語は句の中にはいつた場合、判定がつく。みわけのつきにくい單音語、例えば人名、地名、専門語とかはなんらかの四聲標記が必要である。③新文字の獨立性を忘れず、「なんとか字母」のように漢字の「姨太太」とするな。」（普通中國語の字眼の研究）という理論が當を得ていると思う。

魯迅も述べている。「漢字ラテン化の方法が一たび世に出ると、方塊字（漢字）系の簡體字と注音字母はみな負けてしまつて、現在まだ争つているのは國語ローマ字だけである。このつづりの擁護者がラテン化を攻撃する最大の理由は、それがあまりにも簡單すぎて多くの單語のみわけがつきにくいということである。これは確かに一つの缺點である。凡そ文字

はもし學びやすく書きやすくしようとすれば、たいてい精密でなくなる。複雑な文字が必ずしも精密であるとはいかないが、精密にしようとすれば逆に煩雜にならざるを得ない。ローマ字綴りは四聲を明確にし、ラテン化は不明瞭である。従つて「東」と「懂」の區別がつかない。だが方塊字は「東」と「棟」の區別はつくけれどもローマ字綴りは區別がつかない。単に一・二の文字が區別できるかどうかで新文字の優劣をきめようとするのは不適當である。ましてや文字は一たび文章の中に組み入れられるとその意義は明らかになるものだ。"ラテン化にはこのような空談の弊害はない。話されたらすぐ書ける。それは民衆とつながっており、研究室や書齋の中でのあそびではなく、街のなかのものである。それは舊文字との関係はうすが人民との関連は密接で、みんなが自分の意見を發表し、必要な知識を吸収するのにこれ以上簡便な文字はないであらう。そしてラテン化を識つた人々が創作するようになって初めて新しい中國文字が生れ、現代中國の新文學が生れるといえる。"（「論新文字」）

あえて長文を引用したのは、魯迅の意見の一言一句が、總體的にみた場合に、鋭く本質を衝いていると考えるからである。すなわち魯迅は、「ラテン化の提議こそは目前の大衆語文問題を解決する最も主要な「カギ」——「中國には文字がないに等しい」という根本問題——をみつけたものである。"（「中國語文的新生」）といい、それはまた、「ただ二八個の字母をおぼえ、綴り方とかき方を學びさえすれば、なまけものと低能以外は誰でも書け、みてわかるようになる。更にそのいいところは速く書けることだ。アメリカ人は時は金なりといつたが、私は時は命だと思ふ。むやみに人の時間を費すものは人の生命財産を害うものである。"（「門外文談」）といつている。そして更に重要なことは、彼は根底に「知識の流布を阻害している「ガン」、非語文と方塊字をとり除け"（「中國語文的新生」）と主張するけれども、決してそれまでの文化遺産をないがしろにするのではなく、そのやり方も急激な變化を目指してはいないことである。"ラテン化を普及するのは大衆が自らの手に教育をかちとつた時である。現時點で我々ができることは、①ラテン化法の研究、②試みに廣東語など比較的的讀者の多いことばで「もの」を作り出してみることに。③精密な一歐化」した語文は支持し用いねばならぬ。"

〔答曹聚仁先生信〕ラテン化は「先ず讀書人から實驗して、初めに字母と綴り方を紹介し、文章を書く。はじめは日本文のように、ただ名詞の類の漢字のみは残しておいて、助詞、感嘆詞、その後、形容詞、動詞とラテン化綴りで書くならば、眼なれもいし、理解もよくなるだろう。横書にすることはいうまでもない。」〔漢字とラテン化〕と。歴史的にみてもほぼまちがいのないこの理論は、魯迅の深い學殖もさることながら、「大衆」からとび離れない思考のもたらしたもの、とは言えないだろうか。

## 五

政府命令で施行された形の國語ローマ字は、「精確ではあるけれども複雑すぎる」せいもあつて、遂に廣く民衆の中へ普及することなく終つた。片や下の方から出てきて、「簡單だがお粗末でない」ラテン化新文字は、當時解放區で非常な普及をみた。そこでは「新文字を識らないものは新文盲といつて笑われた」〔漢字の運命〕ほどであつた。ところがこれも、「四二年の「整風」で大衆路線を確認した際、ラテン化新文字は再檢討を餘儀なくされ、一部の新聞や實驗區で新文字を使う以外、他の全邊區では強制せず、言語運動は表現の平易化、豊富化と民衆の言葉の學習、および識字運動に重點を移した。」〔中國現代教育史齋藤、新島共著〕のである。毛澤東は一九四〇年、「新民主主義論」の中で、「先進的な人びとによつて創造された學ばれた理論は、大衆自身のものとならなければ革命の爲の力とはなりえない。つまり、理論、文化が社會的な力をもつためには、それが大衆のものとならなければならぬ。この目的を達成するために、文字は一定の條件のもとで改革を加えられなければならない、言語は民衆に接近しなければならない」と言つてゐる。そうするとこのラテン化の頓挫という問題も、ラテン化つまり文字改革の理論がまだ十分大衆のものとなりえていず、それは戰略的に長い時日を経た目標としては正しかつたが、急速に普及することは戰術的に無理があつたこと、「無」に近い状態だつたが故に漢字教育よりもいつそラテン化を、という單純化された思考があり、摩擦が大きすぎたという理由で説明できる。すなわち、知識人たちは大衆の中にはいつたつもりでも、まだ大衆のためにする思考が残つており、大衆自身の心底からの願

いにそぐわなかつたのである。だから、まず農民の側から漢字學習の要求が出され、ついで知識人や郷紳の方からも新文字に對する疑問が出された。農民たちはせつかく文字をならうからには、自分の子供の場合でも自分自身の場合でも、官吏や商人がよみかきして（長い間苦しめられてきた）文字、（彼らたちさえ讀める）書物に書かれた文字を習いたいと望んだのである。農民たちがその文字を知つてどんなに嬉しがつたか、いまその一例をあげて證明しよう。

「老人は胸のポケットをひっくり返して土のついた布を引つぱり出した。念入りに包をあけて中から小さな手帳をとり出した。「ごらんなさい。」と彼は言つた。「私はもう二百以上の文字が讀めます。毎日赤軍の兵隊が四つずつ教えてくれます。山西に私は六年もいましたが、誰も私の名前の書き方さえも教えてくれませんでした。それからみたつて赤軍は良いですかね、悪いですかね。」彼はひどく自慢して自分で書いた下手な文字を指した。それはきれいな席の上を牝鶏が泥んこの脚でベタベタよごしたようだった。そして吃りながら新しく書かれた文字を讀み出した。それからひどく有頂點になつて、一氣に自分の名を書いて私に見せてくれた。」（エドガー・スノー：「中國の赤い星」）

冗長に流れた嫌いはあるけれども、以上のように複雑多岐な内容をもつ大衆語論争は、時の民族運動の一環として、文化教育面の土臺を培う運動であつた。語文運動家たちは、外敵の侵略を防ぎ、國體を維持し、將來の繁榮した國家建設をめざして言語運動に取り組んだ。ただその中で、國語ローマ字派とラテン化新文字派のように、眞に大衆の立場に立ち、大衆の利益から出發する考え方と、自稱大衆語論者でも、觀念的傾向の強い考え方をするものとの間に若干の軋轢が生じた。しかし、われわれの周圍にその時代の政治動向に何らかの形で制約を受けないものはないように、どんなに深淵な學問でも大衆の幸福の爲に奉仕しない學問は考えられないように、この時の語文論争者たちも、結局は危機に瀕した祖國を救うため、お互いに譲歩し合ひ、語文運動統一戰線結集の方向へむかつたのである。そしてあらゆる國の歴史事實が示す通り、中國の場合も、「大衆語」（簡體字、漢語拼音方案、普通話）普及運動は民族獨立と軌を一にして、今や堂々とその巨歩を進めている。

（大學院博士課程）